

短 歌

山武市指定文化財(史跡) 常福寺の旧跡(埴谷)

常福寺は、寺院過去帳によると、大同元年(八〇六)九月、僧空海により開山され、以来真言宗として六百四十年余り経ち、宝徳元年(一四四九)四月に日蓮宗に改宗され、本山平賀本土寺九世妙高院日意が開基とされています。

現存する建物は仁王門のみが古く、他は明治三九年以降に建てられたものです。



常福寺の旧跡

花の心

借毛本郷 秋庭 幸子

賑やかに古河の園には桃の花木々に満ちゐて春の来にけり
春風に辛夷の花の散り初めて亡き父母偲び彼岸参りに
水温み鴨の留鳥飛び交ひて蓮華は畦に春盛りなり
クレマチスの蔓からみゐて嫺やかに薄紫の花の咲きたり
朝顔の軒に数多咲きたるは簾の如く心を癒やす
やうやくに暑さ and 和らぎ秋の風葛花見ゆる野辺を歩きぬ
木犀の垣に金色満ち溢れ其の匂ひのみひと日漂ふ

日々の営み

横浜市(元山武市民) 朝見 文江

幼き日好きな童謡「赤いくつ」情緒漂うミナト横浜
亡き夫の何故に現る夢の中来生も又めぐり逢いたし
五月雨の窓にへばりし青蛙何を思うか身動きもせず
備蓄米美味しくするよ主婦の腕家族の期待背に受けながら
土用の日鰯かばやき焼き上げる鰻にや負けん自慢の味さ
スーパ一の五時を過ぎると半額にたまにはいいさ手抜の夕食
病室の夜景眺めつ街灯り退院の日を指で数える

松手入れ

木原 伊藤みや子

咲き誇る手毬の様な石楠花の揚げ羽の舞を暫しとどめて
四温晴早や花莫塵を敷きつめて四代揃うて味わう平和
デイホーム今の幸せ短冊へ筆しなやかに七夕待てり
老鷲と明けゆく朝の靄深し長き畜舎の主偲べり
炎天を見詰め合ひたる夏椿今も懐かし防空頭巾
益々の熱砂に負けず農継ぐ子へ心配りの声援頻り
幾十世越え来し松の手入れ音老の巷に鉄の音冴ゆ

酷暑

本須賀 今関 恵子

昼過ぎの単線列車ひた走る褐色の田の果なく続く
ことごとく夫のケアに頼るのみ右手首骨折の術後二日目
リハビリの迎えのバスに四十五分車窓の眺め新鮮なりし
珍らしき栗の花見ゆ一本二本かの強烈な匂ひ届かず
いただきし三名からの筍煮匂の味わひ少しずつ違ふ
重々と朝靄沈む庭に出で今日の酷暑をおののきゐたり
水遣りの効果は如何に葉の一部茶色に変わりし皇帝ダリア

戦後であれかし

木原 江守 悦子

侍史じしという言葉が急に気になって漢和辞典をめくる早朝
暑いですね合言葉の如く交わし合い慰め合いて今日を凌しのげり
その地位に連綿としてしがみつくと石破氏に美しき日本人を見ず
別れねば出会い無きとは知りながら情を断ち切るこころは傷いたむ
フロントガラスにぶつかってくる赤とんぼ減速しつつ立秋の道
初鳴きの鈴虫ケース積み込んで嫁に出す親の如車こ走らす
子々孫々ずっと戦後であれかしと祈り新たな終戦記念日

「つばめ」

本須賀 川島 隆

納屋の戸を朝一番に開けやれば待ちかねしごとと燕飛び出づ
二番仔のやうやく巢立ち納屋中に糞を残して静寂の戻る
五月雨に青田の色のいや増して点景のごと二羽の白鷺
海近き家の座敷の涼しさよ朝夕なれば寒きほどとか
台風のもたらず慈雨に畑葱も草木の緑も生氣戻れり
読み止しの本なん冊も積み置きし猛暑の続き気力萎えをり
あと何年この世にいるか分からぬが一日一日がすぐく楽しみ

彼岸花

小松 斉藤 利治

生きおれば七十五歳亡妻の十九回目彼岸花咲く
アンパンの甘味ひろがり飲む牛乳此の世の味が仁王立ちする
喜寿ならずアインシュタイン逝きにけり凡天我今朝けさ熱き茶を喫す
黒板へ大書きされし担任の我等送りし Going my way
旨き茶の喫せらるるを願ふなり手術越えたる万緑の朝
空高くシャケの切り身の飯二膳生きる喜（心臓手術を受ける友人の細君へ）び我に満ち来る
清兵衛が葱と豆腐を初音町求め急ぐや妻待つ家路
（たそがれ清兵衛）を読んで

湧きあがる雲

成東 高浦なみ子

「お囃子に送りたいね」と言い言いし母逝きませり祭りの朝に
湧きあがる雲の果たてに浮く山の黒き肌えに光射し初む
刈入れの済みし田の面に若きらの習いの笛の遠く渡り来
亡き姉の庭に咲きおり鉄線のむらさき匂う土やわらかき
樟脳の香りたゆとう真昼間の日差しまぶしき初夏はつなつに入る
冬越しの足長蜂あひながばちや羽音たて今飛び立ちぬ梅雨の晴れ間に
末の子の生あれし五階に西日射す解体進む病院の午後

令和七年

本柏 竹之内幸子

同じ子か秋の訪れジョービタキ庭で我待つ暫く居てね
リハビリの辛さをみせるミスターは再起を祈る皆を元気に
華麗なる野球魂ホームランミスター野球一番星に
弥生月米が足りないやっとなた古古古米や備蓄米とも
対向車鹿兒島札幌ナンバーのトラック多しどうかご無事で
予約無し病院駆け込み六時間検査三回でも生きていた
定刻の信頼されたJR人手不足が深刻になる

春

日向台 立川目陽子

春の光を首筋にあつめ合掌す文獻院古道漱石居士に
「竹久夢二を埋む」と彫られし石は輝り墓地の境にあをいムスカリ
線香の灰の上を春の蟻が這ふ「小泉八雲」と彫らるる墓前
ビル群の方より帰りしカラスたちゆふべの墓苑の樹上に集まる
つぎつぎと患者立ちゆく椅子の上のミシンの縫ひ目に春めくひかり
われの手を濡らした父の尿なればその体温として覚める掌
あはあはと春は来にけりうどん屋に天麩羅のなば菜が衣に透けて

黒いあげは

日向台 筒井 幸子

ひらひらと黒のあげはが庭に舞うキュウリの花で朝食を摂り
あの人ともつと話せば良かったと思ひ出されるあの日あの時
いきつけの寿司屋の席が空けてあるだんなの新盆迎えるように
庭先のほおずき赤く色づいて仏だんにあげ玄関飾る
友と行くいつもの店で焼サンマ北海道の匂をいただく
大好きな甲子園での激闘にテレビの前で手に汗にぎる
下の子が生まれる時に来てた子が男の子出産月日は早い

「何冊かの本の思ひ出」

大網白里市(成東短歌会) 深川 義弘

不条理な出自の悲しみ思い遣る『青年の環』に感銘うける
芸術とは何であるかを法廷に問うた詩人の『氾濫』を読む
奥付けの(はる■)の印の朱のうすき『晶子曼荼羅』一章ひらく
生きるため故郷をすてた『蒼茫』の声なき民の悲惨さを知る
記憶なき復員兵のモミイチは『星の牧場』にジプシーと出会う
『生活の探求』を読む。誠実に日々の暮らしの真実を追う
イタリヤのA・モラーヴィア氏の短編集『ぼくの世界』の世界を愉しむ

侘しさの雪

市原市(元富口) 村上 久江

さらさらと風にほどこかれ花薄手もて触るれば花粉散らせり
わが眼^{まなこ}永遠に閉ぢらるる日まで食欲に見よさらに哀しく
ひとり食す夕餉の卓にしんしんと侘しさの雪降りつもりゆく
「ただいま」とわたしがわたしに声を掛け待つ人の無き家に帰りぬ
ぱりぱりと食してはまた食し生きるといふエネルギーにわれかられきぬ
さふいへば離別といふ選択肢もありたるやうな夫との別れ
侘しかるわが庵にも極月のおとづれおのづと今年も暮るる

不可もなく可もなく

日向台 山本 陽子

早苗田に染める夕陽の映え渡りさみどりの面に稔りの季待つ
猛暑日の一匹の蟻の奮闘に大きき餌を得る小さき命が
独り居の友の言葉の重かりし語彙も忘るる声も出にくしと
身の丈に生きよと論せし亡き母を眠れぬ夜半に思っていたり
飼ひ猫に椅子を取られて座卓へと視線は下がり馴染みの景良し
雨戸^とを繰ればその瞬間に鶯の一声ありぬ新緑眩し
不可もなく可もなく過ぐる一日なり夕闇迫り予約米研ぐ

保護するも

白幡 渡辺 幸子

唐突に猫の親子の現れて庭に遊ぶを家猫見つむ
母猫の縋るがごとき眼差しに覚悟の餌付けひと月の過ぐ
三匹の仔猫の保護に母猫は土竜啜えて軒下に啼く
保護すれど敵意露わな母猫に倣いて仔猫も牙剥く日々に
苦渋なる思いの末に耳カット済ませし母猫庭に放てり
検査せし証明書添え貰われてゆきたる茶トラと三毛に幸あれ
三月経て漸く抱き上ぐ黒猫に名前付けよう息子夫婦と

芍薬の精

沖渡(沖渡短歌会) 富谷 治代

大き包みひらく手に匂い来るシャクナゲの花高貴にひらき母の日
波に乗るサーフィン族の姿ありこわい者しらず目の前にする
細径の夜の暗がりほたる狩り娘^こは手を引きくるる絆深まる
のら猫を連れて遊ぶ親ねこの人の気配ににげる早さよ
風に揺れ尾花の白き野の小径せせらぎひびく更に静けき
狭庭辺に春の息吹きを深めつつ次々ひらく芍薬の精
赤トンボ渡り鳥のごとく滞在し秋求めてか姿の消ゆる

雨蛙

日向台（沖渡短歌会） 須賀 華子

凄^まかった高校野球の決勝戦外野席まで超満員に
選手達心身共に立派にて誇りに思う両チーム共
田植え時に気候変動心配す米の収穫無事で嬉しや
猛暑日の庭に水撒く日の出前薔薇^{ばら}の花芯に雨蛙居る
早朝にきょうも来ている雨蛙心地良いのか花びらの中
庭に水季節外れに咲く薔薇もついには散りぬ淋しさ残す
自然ほど美^はしきものなし空を見よ無限に広がる宇宙の世界

洞窟の中で

東金市（沖渡短歌会） 八乙女文男

いつまでも変わらずにと手を振る流転の如くの御時世なれば
さよならを言うと真顔になぜかなる笑顔の数だけ淋しさは増し
閑静な住宅街の公園は子供の声などもう聞こえない
やりとげる事なき思い切なさは洞窟の中でさまようごとし
入院の兄に届かぬメッセージメールの中に文字をつらねる
病棟の朝の始まり遅すぎて早起き癖はなんともしがたし
昼時にやたらと姉から絵文字来る弟を気づかう暑中に見舞いか

うなる夏

習志野市（沖渡短歌会） 山田 信治

うなる夏何んでこんなに暑いのか外の仕事死を覚悟して
さつま芋草取りに行き汗をかく風吹き冷やり天の恵みに
夕ぐれに満天の空花火咲く仕事帰りで一人眺むる
夏なればクワガタ飛びて想い出を未来にたくし子供に託す
夏くれば真赤なスイカ頬張りてぐちやぐちや口に父母もおこらず
夏すずみお盆来たりて菊の花虫の啼く声先祖にささげ
本年は九十四才両親の元気な姿にあやかりたし